

正成伝説と後期読本

——『屏風怨霊四谷怪談』の創作方法を中心に——

李 忠 浩

1. はじめに

楠正成をめぐる伝説は近世初期に発生・流行した太平記読みを契機に広く受容され、さまざまな文芸ジャンルに一つのアイコンとして定着していくことになる。ジャンルを問わず広範に流布していた正成の伝説だったが、近世文学の中で受容される過程については、これまで体系的に検証されていない。近世期の文学の中では、初期の仮名草子、浄瑠璃に始まり、浮世草子や歌舞伎など多くのジャンルに渡って、正成伝説が取り入れられた形跡が見られるが、それは近世中期以降の読本も例外ではなかった。

本発表では正成伝説の世界を描いた後期読本作品の『^{びょうぶおんりょう}屏風怨霊四谷怪談』(山月庵主人著、天保6年〈1835〉刊)を取り上げ、本作が『東海道四谷怪談』に基づきながら、正成伝説をどのように取り入れ、変容させていったのかを、その先行作や同時期の太平記受容との関係を通して検討していくこととする。

2. 『屏風怨霊四谷怪談』の作者山月庵主人について

『屏風怨霊四谷怪談』は天保6年、大坂の秋田屋市五郎版で、作者は山月庵主人、挿絵を担当したのは菱川清春である。本発表では関西大学図書館中村幸彦文庫本を底本とする。まず、本作の著者である山月庵主人について先行研究を参照しながら説明したい。

山月庵主人は天保年間頃に洒落本や滑稽本、読本などを執筆している人物で、京都を中心に活動をしていたと見られるが、その生涯についてはまだ詳しく知

られていない。

『国書人名辞典』によると、山月庵主人は瀬川恒成と同一人物であり、初代暁鐘成の門人であると記されている。

瀬川恒成 戯作者。〔生没〕生没年未詳。天保（一八三〇～四四）頃の人。
〔名号〕瀬川氏、また山川氏。名、貞卿。字、和忠。通称、美濃屋文蔵。
号、澄成・恒成・鶴山逸人・隔梅山（散）人・関亭京鶴・山月庵主人・山月庵京鶴。〔経歴〕京都の人。暁鐘成の門人。読本及び洒落本を執筆した。^①（傍線部は発表者による。以下同。）

しかし、西鶴以降の京撰の小説家や浮世絵師などの小伝を記した『京撰戯作者考』（烏有山人著）では、山月庵主人と見られる人物は京鶴として立項されており、さらに注目すべきことに同書の中で鶴山逸人こと瀬川恒成はそれとは別人として挙げられている。

京鶴 京師の人、文政の頃、戯作の書を出す、名は貞卿、字は和忠、山月主人と号す、山川氏、俗称美濃屋文蔵、初暁鐘成門人と成、澄成と号す、当時西の京に住す

鶴山逸人 京師の人、瀬川氏、名は恒成

春陽斎菱川清春 京師の人、医師村何某の男、幼名国次郎、後、国助と更む、初、上田公長門人、今時、紀州若山に移住す、更めて小野広隆と号す^②

山月庵主人と瀬川恒成が別人であることは、中野三敏氏が『洒落本大成』所収の『傾城情史大客』の解説において言及している。

「大系」の解題に、作者関亭京鶴は山月庵京鶴、山月庵主人、鶴山逸人、

隔梅散人等の号あり、「嵐峡花月奇譚」（天保五年刊）、「四谷怪談」（天保六年刊）等の著ありと。これは山崎麓稿「日本小説年表」付載「日本小説作家人名辞典」の記述によるものであろう。右「人名辞典」には、更に「瀬川恒成」の名でも記される。今「嵐峡花月奇譚」奥付には、「鶴山逸人瀬川恒成作、隔梅散人関亭京鶴校、青楊斎菱川清春画」とあり、「四谷怪談」には、山月庵主人作、菱川清春画とある。また、山月庵主人作、菱川清春画の滑稽本に「鬼霊論」（天保五年刊）及び「変宅論」（同年刊）があり、同じく洒落本に「意気客初心」（天保七年刊、本大成第二十九卷所収）があるが、こちらは清春は関わっていない。山月庵主人と菱川清春が作画に顔を揃え、また、関亭京鶴と清春とが組むこともしばしばあり、山月庵と関亭京鶴が同一人であることは確証があるが、瀬川恒成と京鶴が同一人であることの確証はない。「花月奇譚」の序は京鶴撰文で、中に「今春我友鶴山子、営業之暇、戯翻案之、……乞余干校正」とあって、この文章に従う限りは別人である。また同序文の署名には「山月庵京鶴」と記されていて、山月庵と京鶴とは、確かに同一人としてよい。山崎氏（発表者注…『大人名辞典』の「瀬川恒成」項執筆者）は瀬川恒成と山月庵京鶴をいかなる理由で同一人とされたものか、しばらく後考を俟つ。（中略）菱川清春は、井上和雄「浮世絵師伝」に、俗称吉左衛門、薫泉斎、雪艇と号し、後に小野度隆と改名、師宣以後菱川の五代目を名乗るものかという。天保初年には大坂上町に住したともある。^③

中野三敏氏は『花月奇譚』の序文の記述に従う限り、山月庵主人と瀬川恒成は別人であるとして両者の同一人物説に疑問を示している。

次に、中野三敏氏は『洒落本大成』所収の『意気客初心』の解説において、次の引用の傍線部のように山月庵主人が山東京伝の門人である可能性を示している。

著者山月庵主人は、本大成第二十八卷所収「傾城情史大客」の著者関亭京鶴と同人故、同書解題を参照されたい。ただし、本書上巻十丁オに「吾師山東先生云々」とあれば、一時は江戸にいて、京伝門人となったものらしい。その他呉鶴巢主人、大和の欲若等は未詳。^④

また、表1は「山月庵主人」の関連著作一覧表であるが、⑧『御室八十八ヶ所／四国栗毛』（天保年間）や⑨の『滑稽教訓／御影参』なども、本文の記述や先に引用した『京撰戯作者考』の内容から見て、山月庵主人作の可能性があると思われる。

表1 山月庵主人関連著作一覧

番号	年 時	書 目	備 考
①	天保3年〈1832〉	『傾城情史大客』（1巻1冊）	洒落本、関亭京鶴作
②	天保4年〈1833〉	『滑稽新書／変宅論』（2冊）	滑稽本、山月庵主人作、菱川清春画
③	天保5年〈1834〉	『滑稽鬼霊論』（2冊）	滑稽本、山月庵主人作、菱川清春画
④	天保6年〈1835〉	『屏風怨霊四谷怪談』	読本、山月庵主人作、菱川清春画、三代目尾上梅幸序
⑤	天保7年〈1836〉 校者序	『意気客初心』（2巻2冊）	洒落本、山月庵主人作、呉鶴巢主人校、大和の欲若跋
⑥	天保7年〈1836〉	『小夜衛真砂物語』（10冊）	読本、山月庵主人作
⑦	天保13年〈1842〉	『神功皇后／三韓退治図会』（5冊）	読本、山月庵主人作、葛飾戴斗二世画
⑧	天保年間	『御室八十八ヶ所／四国栗毛』（2冊）	山東京鶴作、菱川師保画（別書名：『四国くり毛』）
⑨	刊行年不明	『滑稽教訓／御影参』	滑稽本、山川澄成著（別書名：『滑稽道中／御影参』）
⑩	刊行年不明	『堪忍袋』（6巻6冊）	山月庵
⑪	天保5年〈1834〉	『嵐峡花月奇譚』（2編10冊）	読本、鶴山逸人瀬川恒成作、隔梅散人関亭京鶴校、青楊齋菱川清春画

3. 『東海道四谷怪談』と『屏風怨霊四谷怪談』の概要と登場人物

山月庵主人作の『屏風怨霊四谷怪談』は、『東海道四谷怪談』の内容を基にして、その内容を順次借用しながらストーリーを展開しているが、『東海道四谷怪談』の赤穂義士たちの外伝に該当する部分を南北朝の動乱を生き延びた楠家の遺臣たちの外伝へと改めることによって、新たな展開を作り出している。

その元となった『東海道四谷怪談』は四世鶴屋南北作の歌舞伎狂言で、文政8年(1825)に江戸中村座で初演された南北の代表作である生世話狂言で、『仮名手本忠臣蔵』の世界を用いた外伝として書かれた。本作にはお岩伝説に加えて当時の不倫の男女が戸板に釘付けされて神田川に流されたという話や、深川の砂村隠亡堀に心中者の死体が流れ着いたという風聞などが取り入れられている。

そのストーリーは、元塩冶藩士の四谷左門の娘お岩と、夫である民谷伊右衛門、お岩の妹であるお袖、お袖の許婚者である佐藤与茂七、薬売りの直助を中心に展開する。高師直の家臣伊藤喜兵衛の孫であるお梅は伊右衛門に恋をし、喜兵衛から贈られた薬のために容貌が崩れたお岩は狂乱して命を落とす。伊右衛門はお岩と小平の死体を戸板にくくりつけて川に流すが、お梅との婚礼の晩にお岩の幽霊を見て錯乱し、伊藤喜兵衛とお梅を殺して逃亡する。お袖は宅悦に姉の死を知らされ、仇討ちを条件に直助に身を許すが、そこへ死んだはずの与茂七が帰ってくる。結果として不貞を働いたお袖はあえて与茂七と直助の二人の手にかかり死ぬが、直助はお袖が実の妹だったことを知って自害する。伊右衛門は蛇山の庵室でお岩の幽霊と鼠に苦しめられて狂乱するが、そこへ真相を知った与茂七が来て、舅と義理の姉の敵である伊右衛門を討つ。

このあらすじを踏まえて、『屏風怨霊四谷怪談』が『東海道四谷怪談』の内容を取り入れた様子を表2の『屏風怨霊四谷怪談』のあらすじを通して検討したい。

『東海道四谷怪談』が五幕で構成されていたのに対して、『屏風怨霊四谷怪談』は十回構成で、各々の回は「縁覚界」・「畜生道」などの題が付けられて仏教的

表2 『屏風怨霊四谷怪談』のあらすじ(1/2)

段落	内容
<p>第一回 「縁覚界」</p>	<p>楠正元は楠正成の孫、楠正儀の息子で、十五歳で千劍破の城主となり、和田正武と足利打倒の誓いを交わす。その後、正元が足利勢に破れると、その家臣である原田隼人、神並種茂は名を茜与茂七や田宮伊右衛門と変え、それぞれ越前と鎌倉に向かう。田宮伊右衛門は友人の紹介で誰袖を妻に迎えるが、誰袖の母は楠正成公の奥方に仕えた者である。お岩は誰袖の連れ子で、妹のお波はある農人にやったという。</p>
<p>第二回 「畜生道」</p>	<p>猿回となった茜与茂七は立田屋の遊女夕波と親しくなる。与茂七の猿の毛色が白くなり、人々は与茂七を白猿舞の与茂七と呼ぶようになった。</p>
<p>第三回 「餓鬼道」</p>	<p>絹商人の松屋直助はもと鎌倉の由緒ある武士の子であったが、夕波をめぐって与茂七と恋敵の関係にあった。与茂七に嫉妬した直助は与茂七の代わりに猿回芸をしようとしていた庄太郎(実は兄の根津揚之進)を切る。夕波は庄太郎の死骸を見かけて、与茂七が死んだと勘違いする。</p>
<p>第四回 「地獄道」</p>	<p>与茂七は次の日庄太郎が殺されたことを知り、足利家からの追手の仕事と思い込み越前を去ることにする。一方、絹を買う予定の金を使い込んで夕波を身請けした直助は、店へ戻らず、兄根津揚之進がいる鎌倉に向かう。葉売りの黒田熊蔵は田宮伊右衛門の入婿となりお岩と結婚し、田宮伊右衛門の没後に田宮伊右衛門を名乗る。金に困った伊右衛門はお岩が母から譲り受けた櫛を足利家の家臣遠藤喜右衛門のもとに持ち込むが、この時喜右衛門の娘お花は熊蔵に一目惚れして病に臥す。その後お岩は女子を産み、喜右衛門は祝いの品として木綿と薬を送るが、その薬を飲んだお岩は苦しむ。喜右衛門は伊右衛門にお花との縁談を持ち込み、「其櫛こそ楠家の余類の詮議の証頭」だと脅して迫る。</p>
<p>第五回 「人間界」</p>	<p>家に帰った伊右衛門はお岩の蚊帳までも売り払おうとし、それを止めようとしたお岩の生爪が抜かれる。お岩は赤子の首に噛み付いて殺した上で自害する。伊右衛門即ち熊蔵は按摩宅悦を殺して、戸板に二人を張り付けて川に流した上で二人の密通を装う。</p>
<p>第六回 「菩薩界」</p>	<p>松屋直助は夕波を携えて鎌倉に行くが、兄の揚之進は浪人の身で行方知れずとなっている。直助は隣の浜地玄吉と親しくなるが、ある日玄吉は温泉所に囲碁を打ちに行き、そこで与茂七に出会う。碁に負けた玄吉は怒りのあまり碁盤を投げ、与茂七に怪我を負わせる。伊右衛門の賭け仲間である鶉の市六は伊右衛門から秘伝の薬である鶴胆丸を頼み、使いの佐五郎に渡す。佐五郎が加賀に向かう途中、地藏堂で養われていた与茂七の白猿が鶴胆丸を奪って逃げてしまう。佐五郎は白猿を殺そうとするが、道粹が出てそれを止め、佐五郎は懺悔して道粹の弟子になり、名を指月に改める。白猿は道粹に鶴胆丸を渡す。</p>
<p>第七回 「天上界」</p>	<p>伊右衛門は柳ヶ淵でお岩の梳を発見するが、そこに戸板に貼り付けられたお岩と宅悦が現れ、伊右衛門を恨んだ後に蜻蛉となり立ち去る。この様子を見ていた直助が、役人に告げると脅して梳を受け取る。道粹は指月をつれて東を目指していたが、箱根付近で病に苦しんでいた乞食に鶴胆丸を与える。この乞食は茜与茂七であり、鶴胆丸によって直ちに回復する。</p>

表2 『屏風怨霊四谷怪談』のあらすじ (2/2)

段 落	内 容
第八回 「声聞界」	<p>夕波は梳を見て実の姉の物であることを知り、直助に姉の敵を討つよう頼む。直助は夕波に枕を交わそうと迫るが、この時、宿に与茂七が来る。夕波と直助は与茂七を見て幽霊だと驚くが、与茂七は事情を説明する。直助が切り殺した庄太郎は、実は直助の兄である根津揚之進であったことが分かり、直助は改心し自害する。道粋は富士山へ登ると、白猿が案内する所に庵があり、一人の男が住んでいた。男はいきなり道粋に切りかかるが、白猿が身代わりに打たれる。道粋が事情を聞くと、その男は楠正元であった。そこで道粋は正元に家臣を連れて世に出るべきことを諭す。</p>
第九回 「修羅道」	<p>お花の妹であるお雪の体にお岩の霊が憑依して恨みを語る。喜右衛門の妻二見は閉じ込められたお雪が人形の胸に針を刺す様子を覗き見て命を失う。次の日、お雪が根無川に飛び込もうとする様子を見た喜右衛門はそれを止めるが、取り付いたお岩は喜右衛門を掴んで諸共に川に飛び込む。伊右衛門は祝部にお岩の死霊を遠ざけるよう依頼する。</p>
第十回 「仏界」	<p>伊右衛門は祝部から与えられた神章を貼った屏風の中で隠れていたが、七日目の夜、祝部がやって来て屏風の神章を取り替えるべきというが、その祝部は実は宅悦であった。伊右衛門はお花と玉虫を見誤って切り殺す。次の日から、お岩と宅悦の怨霊は毎晩のように伊右衛門のもとを訪れるようになる。</p> <p>伊右衛門は鎌倉に遍参していた道粋に頼み、道粋は伊右衛門宅の仏前で大般若経を唱える。その時、茜与茂七が夕波を連れて来て、伊右衛門を敵討ちしようとするが、道粋が止め、道粋は伊右衛門には仏門に入ることを勧め、与茂七と夕波には代わりに伊右衛門の衣服を刺すよう説得する。そして、お岩と宅悦の亡霊は自分が成仏させたという。道粋は東明寺の主となり、伊右衛門は名を観山と改め、僧となる。道粋は与茂七に楠正元の隠れ家を教え、与茂七は正元のもとへと向かう。</p>

な色彩を呈している。まず、第一回から第四回までは、赤穂義士の外伝を楠家遺臣の物語へと作り変えるために、楠正元（正成の孫）の時代を舞台として、楠家の家臣である原田隼人と神並種茂を登場させ、以後この二人を中心に物語が展開する。二人は正元が足利勢に破れると名を変え、それぞれ越前と鎌倉に向かう。茜与茂七は楠家の家臣であったことを隠すために猿回となり、一方、田宮伊右衛門は友人の紹介で誰袖を妻に迎えるが、誰袖にはお岩という娘がいた。薬売りの熊蔵は伊右衛門の入婿となってお岩と結婚し、伊右衛門の没後に田宮伊右衛門を名乗る。

第四回の途中から第七回にかけて、足利家の武士喜右衛門から送られた薬を飲んだお岩は顔が崩れ、赤子の首に噛み付いて殺した上で自害する。伊右衛門は按摩宅悦を殺して、戸板に二人を張り付けて川に流した上で二人の密通を装う。

第八回では、夕波が直助に姉の敵を討つよう頼み、直助は夕波に枕を交わそうと迫るが、そこに与茂七が来て事情を説明する。それによって、直助が以前切り殺した庄太郎は実は直助の兄である根津揚之進であったことが分かり、直助は改心し自害する。

第九回から第十回までは、伊右衛門はお岩と宅悦の怨霊に毎晩悩まされるようになるが、神力に通じた僧侶道粹が仏前で大般若経を唱え、お岩と宅悦の亡霊を成仏させる。その後伊右衛門は名を観山と改めて僧となる。道粹は与茂七に楠正元の隠れ家を教え、与茂七は正元のもとへと向かう。

以上、『東海道四谷怪談』と対照してストーリーが改変された箇所を中心に紹介したが、例えば与茂七が猿回になって身を隠すこと、悪人熊蔵が田宮伊右衛門を名乗ること、お岩が赤子を殺した上で自害すること、お岩と共に戸板に貼り付けられて川に流されるのは宅悦である点などは、特に目立つ変化と言える。

特に、本作に登場する僧侶の道粹は、『東海道四谷怪談』の小汐田又之丞・仏孫兵衛・小仏小平などの人物群の代わりに登場していると言え、お岩の不幸な運命の予言、与茂七への鶴胆丸の提供、正元への南朝復興の提言、伊右衛門の仏門入りを促すなど、ストーリーの展開に大事な役割を果たしている。

次に、『屏風怨霊四谷怪談』の登場人物設定の特徴について図1と図2の関係図を通して検討していきたい。

図1から分かるように、本作では赤穂義士の物語を楠家遺臣の物語として新しく設定するために、楠正成・楠正儀・楠正元・和田正武など、楠家の人々が登場する。『東海道四谷怪談』は当初二日に渡って『仮名手本忠臣蔵』と同時に上演されていたため、赤穂義士に関する物語を前提として説明する必要がなかったが、『屏風怨霊四谷怪談』の場合はその物語の前提の説明から入る必要が

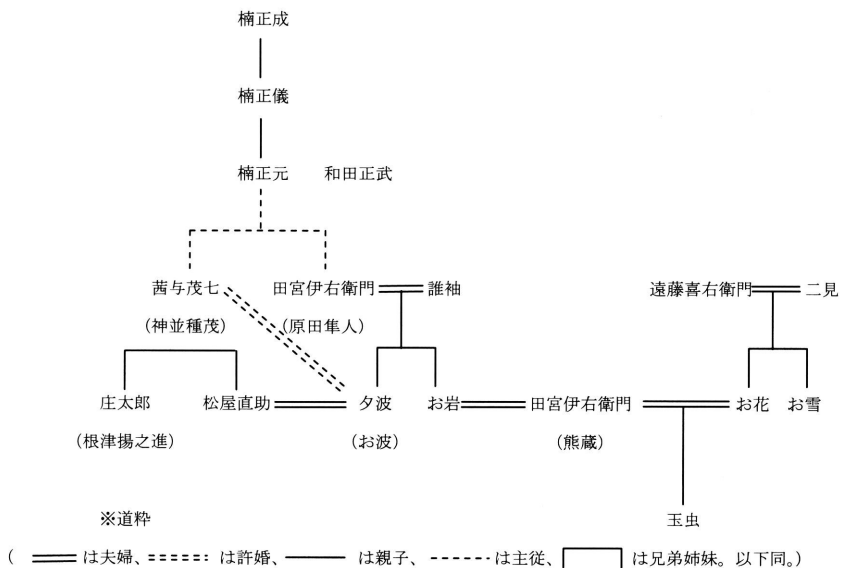
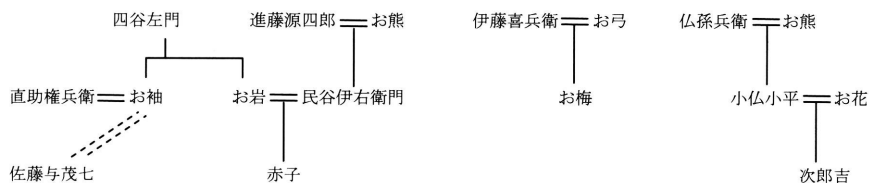


図1 『屏風怨霊四谷怪談』関係図



※按摩宅悦

※小汐田又之丞

図2 『東海道四谷怪談』関係図

あった。したがって、第一回の導入部で物語の舞台設定が行われ、楠正成の後裔である楠正元和田正武を登場させる。作者がこのような時代と人物の設定を構成するに当たって参照したものは何だったのか。つぎにこの問題について先行作との関連を取り上げながら検討したい。

4. 『松染情史秋七草』と『屏風怨霊四谷怪談』の楠家遺臣

—『理尽鈔』からの影響

『屏風怨霊四谷怪談』では正成の子孫である楠正元を中心にストーリーが展開するが、これは曲亭馬琴著『松染情史秋七草』（文化6年〈1809〉刊）からの影響を受けていると考えられる。（図3参照）

『松染情史秋七草』は浄瑠璃・歌舞伎で広く人々に親しまれた「お染久松の心中事件」^⑤を題材にしつつ、主人公を南朝の楠・和田両氏の子女に移して、武家社会の忠孝貞節の物語に仕立てたものである。本作は既存の浄瑠璃作品を下地にしながら楠家の遺臣たちの武勇伝を展開している点で、『東海道四谷怪談』をもとに楠家遺臣の外伝を描いている『屏風怨霊四谷怪談』と類似している。両作品ともに、楠家遺臣の外伝を作り出すために楠正元や和田正武といった武将を登場させて、ストーリーの展開の中心に置いていることから、先に見た『屏風怨霊四谷怪談』の導入部における楠家の人物設定が、先行する『松染情史秋七草』からの影響を受けていることが推測される。

初期読本の『英草紙』（都賀庭鐘著、寛延2年〈1749〉刊）でも正成の子孫が登場し、様々な智略を発揮することや、また『西山物語』（建部綾足著、明和5年〈1768〉刊）では、正成の亡霊が登場するなどの例が見られるが、その利用

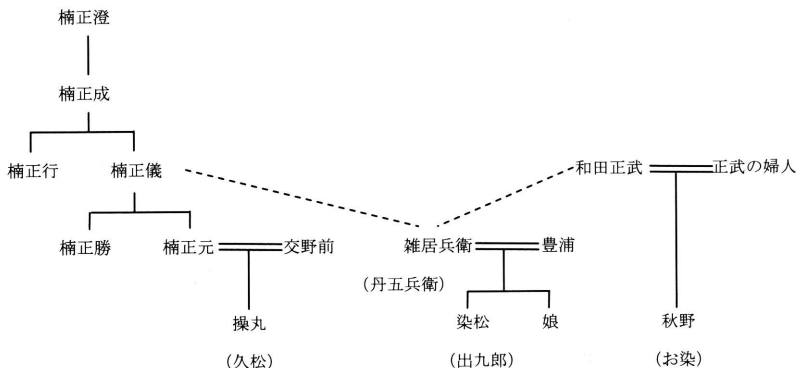


図3 『松染情史秋七草』関係図

は断片的なものにとどまっている。それがここに挙げた『松染情史秋七草』や『屏風怨霊四谷怪談』のような後期読本では、正成の後胤を中心にストーリーが展開しつつ周辺人物たちの物語が付け加えられ、物語が拡散していく傾向を持っていると言える。

特に、注目されるのは正成の後胤として活躍する周辺人物たちの多くが、近世期に入って広く受容された太平記評判を通して初めて『太平記』の世界に登場する人物であるという点である。太平記評判とは、『太平記』の合戦や事件あるいは人物などについて政道論・兵法論を述べた書物で近世初期に流行した。

例えば『松染情史秋七草』と『屏風怨霊四谷怪談』の導入部に登場する楠正元は、『太平記』本編には登場せず太平記評判の代表作の一つである『太平記評判秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』）に名前が見られる人物である。『屏風怨霊四谷怪談』において、楠正元は正成の孫という設定であるが、図4を見ると、この

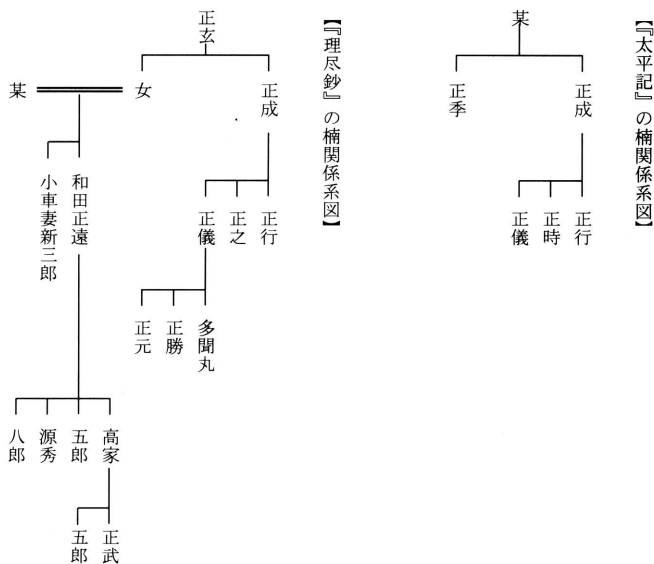


図4 【『太平記』と『理尽鈔』の楠関係系図】

(本系図の作成にあたっては『太平記秘伝理尽鈔』2巻〈東洋文庫、2002年〉の解説を参考にした)

正元は『太平記』には見えず、『理尽鈔』において正儀の三男として登場していることが分かる。また、和田正武の場合は系図からも分かるように、正成の甥である和田正遠の孫に該当する人物である。

このように、『屏風怨霊四谷怪談』では、楠正元や和田正武のように『太平記』には登場しないか、その活躍が僅かな人物を登場させて新しい物語を作り上げているが、これは楠正成の子孫として楠正元や和田正武などを描きながら、楠家の遺臣たちの物語を拡大していった『理尽鈔』からの影響を引継いでいると言える。

以上、『屏風怨霊四谷怪談』に登場する楠家遺臣たちの人物設定について、先行の読本と『理尽鈔』を通して考察してきたが、さらに本作で重要な位置を占めることになる茜与茂七の人物像を通して、その設定が『太平記』の周辺作品との関わりの中で作り上げられたことについて検討したい。

5. 与茂七の人物像形成過程

楠正元の家臣神並種茂は茜与茂七と名を替え、越前に赴き猿回になる。『東海道四谷怪談』の与茂七の職業は小間物屋だったが、『屏風怨霊四谷怪談』で与茂七を猿回に設定したのは、楠正成の家臣である恩地左近太郎を念頭においた設定だと思われる。

この恩地左近太郎は『太平記』には見えず、『理尽鈔』に正成の腹心の部下として登場し、各所で正成と共に奮戦し、湊川の戦いに赴く前の「桜井の別れ」の際には正成に命じられて正行を連れて河内に帰ったことにされている。その後は『理尽鈔』の付録である正成の遺訓書『恩地左近太郎聞書』の編者に擬せられており、太平記評判の一つである『無極鈔』には「恩地五郎」という名で登場している。さらに江戸初期に楠正成の子孫を称する軍学者によって説かれた兵法「南木流」においては「恩地左近丞正俊」とされて、その他にも「恩地正遠」などとも伝えられ^⑥、『南北軍問答』（四段、恩地左近太郎俊綱）、『楠正成軍法実録』（第一、恩地左近）、『楠昔噺』、『太平記菊水之巻』（初段、恩地佐五

郎)のような浄瑠璃作品にも登場している。

このような恩地左近太郎が『屏風怨霊四谷怪談』で猿回りに結びつくことになった由来について考えてみたい。『理尽鈔』では、恩地左近太郎は計略に優れた人物として描かれる。

恩地^{ワうへん}往^{へん}辺^{へん}の内に、高き所に上り、城中の人々の陣^{ちんや}屋^やを見るに、百^{かぞ}を算^{かぞ}へて一として、十に余れること二つ三つ也。所領を以て出し人々ならば、一万二、三千の兵ならんずるか。此一両年は国を捨て、所領を取られて、意ならざる人々ならば、陣所^{つごう}の都合より兵多ぞ在らん。(中略) 恩地^{いにし}、古へより親しき武田十郎兵衛に語りければ、「存^{おもひ}の外に兵の多く侍御陣にて候。見知たる事候。凡そ三万計^{ばかり}も侍るらん」と謂ふ。武田^{いとうれ}、最^さ嬉^きしげにて、「さん候ござんられば、兵は四万余の陣とこそ人々も申れ侍れ。楠殿明日是を向かい給ふ共、手いたき一合戦は仕^しべきにて侍る」と語る。恩地^い小^こ声^{こゑ}に成て、「実^{じつ}に驚^{おどろ}き入侍る。正成是を向かい侍る共、兵は一万にはたるばじければ、中々御城近くも寄する事は有まじきにて侍る。余国の勢をも手に付てと謂ふ沙汰もなければ、由^ゆ々^ゆしき大事とこそ存候へ。」(以下略)^⑦

敵陣の偵察に行った恩地左近太郎は、敵の中に旧友の武田十郎兵衛を見つける。そこで、恩地左近太郎は敵陣の勢力の見積もりを意図的に実際よりも多く十郎兵衛に告げる。おそらく三万人はいるであろうという発言に、十郎兵衛は恩地左近太郎が勘違いをして多く見積もっていると考えて安心するが、これは実は十郎兵衛たちを油断させるための策略であった。ここでは恩地左近太郎は猿回りとしては登場しないが、このように知恵を働かせて敵を欺くことを得意とする恩地左近太郎の姿は、後々猿回りに変装して敵方を欺く人物像へと繋がっていく。

『楠廷尉秘鑑』は宝永年間頃成立と見られる実録体小説で、正成一族とその遺臣たちの活躍を描いたものである。

恩地早瀬窺赤坂城事並成猿回姿赤坂に入込事

すでに其夜も明ければ兩人は朝飯を仕舞猿廻しの装束を着し早瀬は小猿を
肩かたに負、装束入し風呂敷並に杖を取て先に立、左近は米袋背負、古き太鼓
を持て赤坂さしておむきおもむき赴おもむけり。(中略)猿廻しとなつて赤坂へ入り込み湯浅を
はじめ惣兵に油断そうへい ゆだんをせさせたるによつて我たやすく当城とうじょうを手に入れた
り。^⑧

ここでは、恩地左近太郎はかつて楠家に仕えていて、今は猿回になっていた早瀬右衛門と組んで自ら猿回に変装し、敵陣へ入り込んで芸を披露し、敵兵を油断させるというエピソードが描かれている。

また、『楠三代記』は天明年間頃の黄表紙で、

あかさかのしろ正成おちられしのち、六はらよりゆあさ孫六入道をおとう
にぞつけられける。正成こんかうせんにかくれいたりしが、こゝに又大た
うの宮ひやうふ脚しん王はよしのに一城をおんかまへまして、御ぢん
をめされしかば、正成さらばとてない<やうゐしてまづあん内をしつた
るあか坂のしろをせめとりかへさんとさためける。正成おんち左近をもつ
てさる引にやつし、孫六がじょう中をうかゞはせ、さて正中元年四月二日
よしのをたちいで、あかさかにむかひける。^⑨

と、正成が恩地を猿回に変装させ、敵の湯浅孫六のいる赤坂城中を偵察させるという場面が登場するが、恩地のこのようなイメージは当時広く人々に共有されていたと思われる。次に挙げる『川柳楠公記』は楠正成に関連する川柳作品を集めた戦前期の資料であるが、その中で、楠正成の家臣である恩地左近太郎を題材にした作品を取り上げてみると、猿回と結び付いた作品が多数見られる。

- ・ 猿曳の唄を恩地は急稽古（柳多留七八、俳諧鱧二六）
- ・ 猿舞は敵の楽屋を見に這入り（新編柳樽三二）
- ・ 是も縁猿曳になる廻はし人（新編柳樽三二）
- ・ 謡の交ちる猿唄に気がつかず（新編柳樽二）
- ・ 猿唄で恩地は敵をころりさせ（柳多留八一）
- ・ 又あろかいな敵陣へ猿廻（柳の糸口）
- ・ 犬になる恩地は敵へ猿を連れ（梅柳六）。
- ・ 猿回敵も犬とは気がつかず（新編柳樽二七）
- ・ 犬と成つても尾は見せぬ猿廻（しげり柳）
- ・ 犬といふ尻ツ尾は見せぬ猿廻（真砂会）^⑩

このように、『屏風怨霊四谷怪談』において与茂七を猿回に設定したのは、敵陣を偵察する方便として猿回になった正成の忠臣恩地左近太郎を念頭においた創作であることが分かる。

6. おわりに

以上見てきたように、『屏風怨霊四谷怪談』は『東海道四谷怪談』という人気作に基づきながら、楠家の外伝として物語を展開するにあたり、『理尽鈔』という太平記評判から派生し、さまざまなジャンルに描かれた正成伝説を取り入れていることが分かる。

これまで、近世文学における太平記評判の受容についてはあまり光が当てられることはなかったが、今回の例が示すように後期読本においても楠家の遺臣の人物形成という点でその影響関係が見られる。

このような楠家遺臣の物語は、今回の『屏風怨霊四谷怪談』に限らず同時代の読本の中でもいくつか確認される。正成親子の忠義や智略を中心に展開した正成伝説は、後期読本にいたって新たに楠家遺臣たちの南朝復興の武勇伝としての展開と流れがもたらされたと考えられ、今後他の作品も検討しながら、そ

の詳細を明らかにして行きたい。

[注]

- ①『国書人名辞典』、岩波書店、1996年
- ②『統燕石十種』第1巻、中央公論社、1980年
- ③『洒落本大成』第28巻所収『傾城情史大客』中野三敏解説、中央公論社、1987年
- ④『洒落本大成』第29巻所収『意気客初心』中野三敏解説、中央公論社、1988年
- ⑤宝永5年(1708)に起こった大坂瓦屋橋油屋の娘お染と丁稚久松の心中事件を題材にした浄瑠璃・歌舞伎などの通称。浄瑠璃「新版歌祭文」、歌舞伎狂言「お染久松色説販」などがある。(『日本古典文学大辞典』、岩波書店)
- ⑥『太平記秘伝理尽鈔』2解説「正成伝承の生成」、東洋文庫、2002年
- ⑦『太平記秘伝理尽鈔』2巻第12、東洋文庫、2002年
- ⑧博文館編集部校訂『校訂楠廷尉秘鑑』、博文館、1894年
- ⑨『楠三代記』、国立国会図書館蔵
- ⑩母袋未知庵著『川柳楠公記』、書物展望社、1941年

* 討議要旨

大高洋司氏は、①読本『屏風怨霊四谷怪談』は、歌舞伎「東海道四谷怪談」を受容していると論じていたが、舞台の内容をどのように取り込んだのか、②実録物『四谷雑談』を下敷きにしたのではないのか、と質問した。それに対し発表者は、①上演そのものではなく、天保五年頃に大坂で出版された『絵本いろは仮名四谷怪談』を参考にしたと考えている、②指摘のとおり、『四谷雑談』と『屏風怨霊四谷怪談』とは「伊右衛門」の姓の漢字表記が一致しており、参照した可能性は高い、と回答した。

山下則子氏は、①「四谷怪談」の正本は貸本として広く流通し、正本写し合巻なども出版されたため、舞台を見ない人たちにも知られていた。②この作品は「忠臣蔵」の裏版である「四谷怪談」そのものであり、正成伝説を有効に取り入れているとは思われない、と助言および意見を述べた。それに対して発表者は、②指摘のとおり、「忠臣蔵」における赤穂義士の物語を楠家の義臣に置き換えたものといえるかもしれない、と回答した。